

岐阜県における埋甕の系統差と埋設方法

岩 永 祐 貴*

Strain difference and burial method of buried pottery in Gifu prefecture

Yuki IWANAGA

要 旨

本稿は、岐阜県における埋甕の土器型式と埋設方法を検討し、埋甕の展開を示したものである。検討の結果、埋甕には様々な系統の土器が採用され、埋設方法の約7割は正位であることが分かった。

土器型式と埋設方法のセット関係をみると、北飛騨地方に設定したA地域において、北陸系土器に逆位が多くなり、西濃地方の東海系土器も逆位が優勢であった。ただし、全体的に出土する土器をみると、正位が多く採用されており、岐阜県域では統一性を持って埋甕が展開していると言える。

埋甕が統一性を持ちながら展開する一方で、埋設方法に差異がある土器型式が見られ、集団間において埋甕の受容に寛容であるか否かといった背景がある可能性を指摘した。

キーワード：埋甕、土器型式、埋設方法、展開

I 先行研究の整理と研究の目的

埋甕¹⁾は幼児埋葬²⁾や、胎盤収納³⁾などの用途論についての研究が古くから行われてきた。また、埋甕から婚姻関係をはじめとした社会背景を探る研究も佐々木藤雄を中心に行われてきた^{4)、5)、6)、7)、8)}。近年では太田圭が埋設土器の属性分析を行い、中部高地・関東西部の一般的な埋設属性の傾向を抽出した⁹⁾。今泉沙希・小嶋円有佳・小林謙一は多摩・武蔵野地域の埋甕に使用される土器の法量から、死産・流産児の埋葬であったとした。また、属性分析を行い、武蔵野地域の埋甕習俗が斉一性を持って展開することを示した¹⁰⁾。昨今では、埋甕の属性分析を行い、埋甕風習の展開についての研究が盛んに行われている。

本稿において分析対象とする岐阜県では、40遺跡から175基の埋甕が確認でき¹¹⁾、施工率は唐草文3段階期が最も高く約50%であり、全体としては約29%であった^{12)、13)}。本地域では埋甕がどのように展開し、定着しているか未検討である。そこで、本稿では埋甕に含まれる属性の一部である埋設方法と土器型式の関係を整理し、埋甕の展開を検討する。

II 埋甕使用土器型式の整理

(1) 研究の方法

土器型式認定の基準 本節では、岐阜県において出土した埋甕の系統差・時期差を明確にするため、埋甕に使用された土器型式について整理する。型式の認定には基本的に調査報告書に示される型式を使用した。しかし、明らかに型式認定が異なると認められた土器に関しては、筆者自身で認定を行った(表1)。

表1 広域編年表(東海縄文研究会2017)を基に一部筆者加筆

時期	南関東	中信・南信	甲府盆地	東海西部		北陸西部	近畿	
	新地平編年・土器型式	吉川2008	今福2011	増子1998	高橋・嶺越2008	白川1997	泉2008・富井2008	
中期後半	10a	加曾利E1	唐草文1	曾利I古	北屋敷II d / 中富I	1期古	船元III	
	10b			曾利I新				
	10c			曾利II古				
	11a	加曾利E2	唐草文2	曾利II新	中富II	1期新	里木II 1期	
	11b				中富III	2期古	里木II 2期	
	11c1			中富IV	2期新	里木II 在地系	里木II 3期	
	11c2							中富V
	12a	加曾利E3	唐草文3	曾利III	神明	3期	大杉谷1期	
	12b			曾利IV古	取組	4期古	大杉谷2期	北白川C古
				曾利IV新				
12c	曾利V古			島崎III	4期新	大杉谷3期	北白川C新	
				山ノ神I	5期古			
中期末	13a	加曾利E4	唐草文4	曾利V中	山ノ神II	5期新	大杉谷4期	
	13b			曾利V新	山ノ神III			

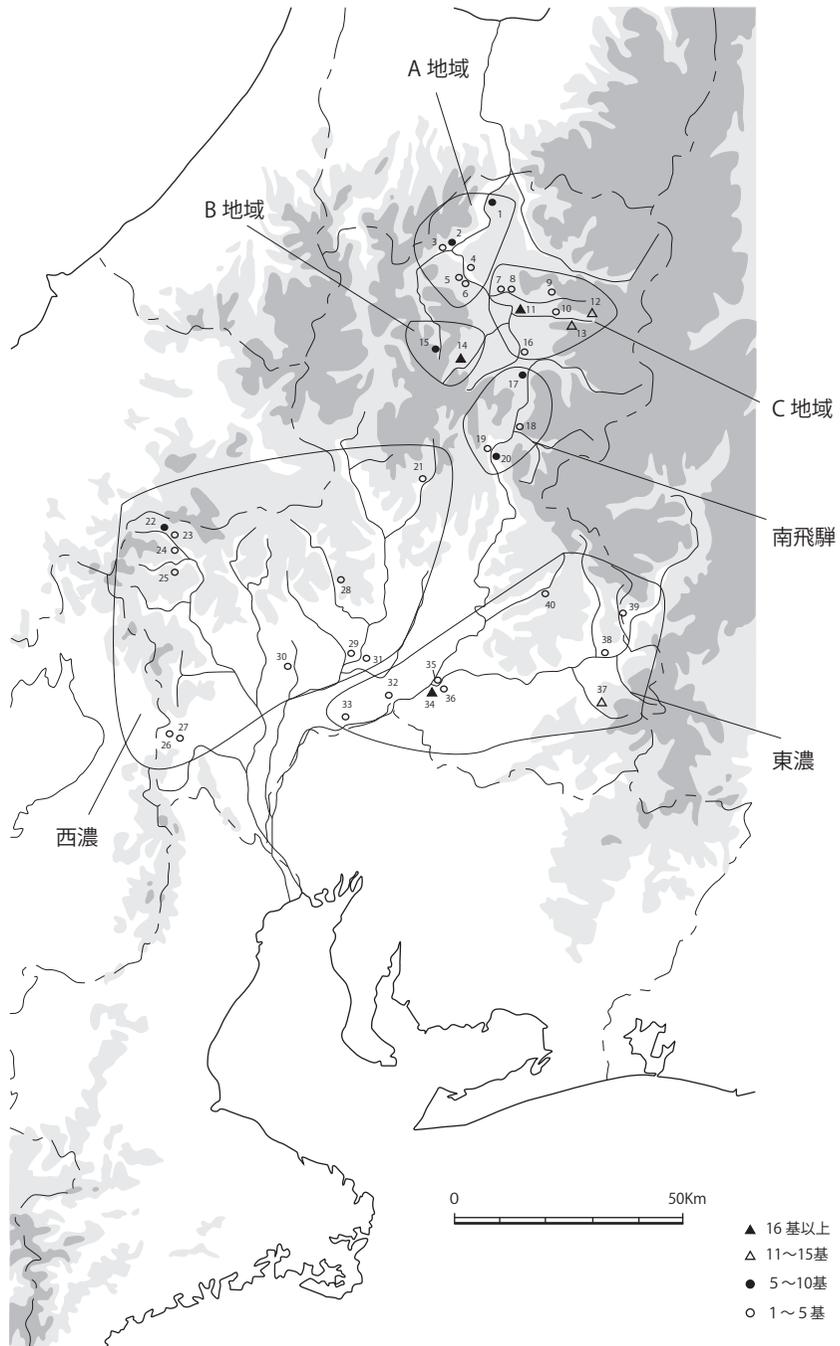
本来であれば、現在最も細分された編年である新地平編年ベースでの検討をすべきであるが、岐阜県では資料の制約から、把握しにくい状況である。また、「唐草文1段階」や「加曾利E2式」といった基準で分析した結果、まとまった数値とならず、一部でしか有益な結果が得られなかった。そのため、「唐草文系」・「加曾利E系」という基準とした。また、地文のみを施文した土器も認められ、詳細な時期の判別がつかなかったものを粗製土器¹⁴⁾として示している。

地域区分 地域区分は河川の流域によって区分する。揖斐川・長良川水系を西濃地方、木曾川を東濃地方、飛騨川を南飛騨地方、宮川水系を北飛騨地方として4地域に大別し分析を行う。埋甕出土遺跡は、飛騨地方に集中する傾向にあることが分かる。そのため、埋甕出土遺跡が集中する飛騨においては、遺跡の集中度合いや河川と宮川水系の上流・下流という視点から、北飛騨地方をA・B・Cの小地域に細分し、詳細に検討することとする(図1)。

(2) 各地域の埋甕の様相(表2～5)

西濃地方 西濃地域では、11遺跡20基の埋甕が確認されている。揖斐郡徳山地区に埋甕出土遺跡が集中している。これは、徳山ダム建設に伴って調査が数多く行われたことが要因として挙げられる。この徳山地域は福井県と隣接する関係にあり、福井からの埋甕伝播の可能性が指摘されている¹⁵⁾。また、塚奥山遺跡において埋甕がまとめて出土するが、10基以上出土する遺跡はない。また、長良川水系では埋甕の出土量が少ないことも特徴と言えよう。

東濃地方 東濃には9遺跡44基の埋甕がある。可見市宮之脇遺跡と中津川市阿曾田遺跡の出土量が多く、宮之脇遺跡からは19基もの埋甕が確認されている。



1島 2堂ノ前 3大明神 4岡前 5中野山越 6黒内細野 7森ノ木 8荒城神社 9牛垣内 10無手無冠農場
 11垣内 12岩垣内 13寺東 14上岩野 15門端 16江名子糠塚 17堂之上 18水口 19的場 20桜洞神田
 21店町 22塚奥山 23塚 24山手宮前 25戸入村平 26小関御祭田 27中野 28底津 29塚原 30御望
 31重竹 32炉畑 33東野 34宮之脇 35牧野小山 36神明 37阿曾田 38上地 39門垣戸 40陰地

図1 埋甕出土遺跡分布図

表2 系統別埋甕集成1

北飛驒地方 A地域						
NO	系統	遺跡名	出土住居	時期	出土位置	備考
1	北陸系	島	SB384	串田新II	正位	蓋石
2		島	SB610	串田新I	逆位	
3		島	SB1004	串田新I	逆位	埋土に神明式
4		堂ノ前	4号	上山田式	逆位	
5		堂ノ前	20号(旧)	古串田新	逆位	底部穿孔、蓋石、口縁欠損
6		堂ノ前	20号(新)	古串田新	逆位	上半部のみ、地文は懸り糸
7		大明神	1号	串田新I	逆位	底部穿孔、蓋石、石で周囲を囲む
8		大明神	3号	串田新II	正位	スス付着、
9		同前	4号	古串田新	逆位	蓋石、底部欠損、網代痕
10		中野山越	15号	串田新I	正位	口縁、底部欠損
11		堀内細野	SB1、a	串田新I	正位	古段階、底部穿孔、網代痕
12		堀内細野	SB1、b	串田新I	正位	新段階、底部欠損
13	曾利系	中野山越	1号	曾利II		底部欠損、合わせ口(2基)、蓋石
14	唐草文系	堂ノ前	7号	唐草文2	正位	
15	東海系	島	SB436	坂組式	逆位	
16	粗製	島	SB55	粗製	正位	底部のみ
17		島	SB55a	粗製	正位	埋土は串田新II式
18		島	SB118	粗製	正位	埋土は串田新II式
19		島	SB710	粗製	正位	
20		堂ノ前	16号	粗製	正位	
21		堂ノ前	17号	粗製	正位	
22	後期	堀内細野	SB2	堀之内	正位	底部穿孔

北飛驒地方 B地域						
NO	系統	遺跡名	出土住居	時期	出土位置	備考
1	北陸系	上岩野	SB21	串田新I	正位	ステレ状正敷
2		上岩野	SB27	串田新II	正位	蓋石
3		上岩野	SB36西側	串田新II	逆位	
4	曾利系	上岩野	SB74	曾利II	正位	
5	唐草文系	上岩野	SB10	唐草文3	正位	蓋石
6		上岩野	SB15南	唐草文3	正位	
7		上岩野	SB30北	唐草文3	正位	
8		上岩野	SB36東側	唐草文2	正位	
9		上岩野	SB61	唐草文3	正位	蓋石
10		上岩野	SB76	唐草文3	逆位	
11		門端	4号(1)	唐草文3	正位	底部欠損
12		門端	4号(2)	唐草文3	逆位	
13		門端	5号	唐草文3	正位	蓋石、底部・口縁欠損、煮炊き痕
14		門端	7号3	唐草文2	逆位	
15	加曾利E系	上岩野	SB16	加曾利E3	正位	蓋石
16		門端	7号2	加曾利E3~4	正位	蓋石、石椀、底部穿孔、口頭部欠損
17	東海系	上岩野	SB51	坂組式	逆位	
18	粗製	上岩野	SB15北	粗製	正位	網代痕
19		上岩野	SB30	粗製	正位	
20		上岩野	SB38	粗製	正位	埋土は串田新II併行
21		上岩野	SB77	粗製	正位	網代痕
22		門端	7号1	粗製	正位	蓋石、石椀、底部穿孔

南飛驒地方 4遺跡から18基の埋甕が確認できた。多くは高山市久々野町の堂之上遺跡と下呂市の桜洞神田遺跡から出土している。本地域は飛驒と美濃をつなぐ地域の1つであり、伝播や土器の交易などを考える上では重要な地域と言える。

北飛驒地方 県内において、最も埋甕出土遺跡が多く、16遺跡94基の埋甕を確認できた。本地域は信州・北陸を結ぶ地域であり、埋甕風習の伝播過程を検討する上で重要となる。

(3) 土器型式構成

西濃地方 土器型式の構成は、北陸系4基で20%・東海系8基で40%・関西系2基で10%・粗製土器1基で5%・不明土器5基で25%であった。本地域では、在地の土器として根付いている東海系が最も多く使用される。その他北陸系の埋甕の存在が確認され、先に述べたように福井との関係も注目すべきである。さらに、他地域では見られなかった関西系の土器の使用が確認できた。

東濃地方 土器の構成は、井戸尻1基で約2%、曾利系3基で約7%、唐草文系1基で2%、加曾利E系11基で約26%、東海系21基で約49%、粗製土器3基で7%、不明4

基で約9%であった。東海系の土器が最も多いことと、加曾利E系の出土が、他地域と比較して突出することが特徴と言える。本地域は岐阜県の中でも地理的な条件と埋甕の型式構成から見ても関東や長野県下伊那地域と関わりが深いと推察できる¹⁶⁾。

南飛驒地方 構成は、曾利系3基で約17%、唐草文系3基で約17%、加曾利E系2基で約11%、東海系2基で約11%、粗製土器1基で約6%、不明7基で約39%となった。北陸系土器は出土せず、唐草文系などの中部高地以東の土器が使用される傾向が強い。こうしたなか、東海系の使用も認められる。

北飛騨地方 土器型式の構成は、北陸系17基で約18%、唐草文系35基で約37%、曾利系8基で

表3 系統別埋甕集成2

北飛騨地方 C地域						
NO	系統	遺跡名	出土住居	時期	出土位置	備考
1	北陸系	牛垣内	10号	申田新I	正位	
2		岩垣内	SB15	申田新II	正位	
3	曾利系	寺東	2号SX2	曾利III	正位	胴部のみ残存
4		寺東	2号SX3	曾利III	正位	口縁・底部欠損
5		寺東	2号SX4	曾利III	正位	口縁・底部欠損
6		寺東	4号SX3	曾利II~III	正位	口縁欠損
7		寺東	4号SX5	曾利II~III	正位	口縁・底部欠損
8		寺東	6号	曾利V	正位	網代版、ススで覆われる
9	唐草文系	森ノ木	6号	唐草文2		
10		森ノ木	13号	唐草文2		石に覆われる
11		森ノ木	16号	唐草文1~2		
12		牛垣内	3号	唐草文1	逆位	住居中央
13		無手無冠農場	SB3	唐草文3	正位	
14		垣内	3号	唐草文3	正位	
15		垣内	4号(SX1)	唐草文2	正位	
16		垣内	4号(SX2)	唐草文2	正位	口縁を打ち欠く
17		垣内	21号	唐草文3	正位	
18		垣内	28号	唐草文2	正位	リボン状突起
19		垣内	38号	唐草文3	正位	底部穿孔、リボン状突起
20		垣内	44号北	唐草文2	正位	胴下半部使用
21		垣内	49号(SX1)	唐草文3	正位	
22		垣内	49号(SX2)	唐草文3	正位	
23		岩垣内	SB1	唐草文3	正位	網代版
24		岩垣内	SB3	唐草文3	正位	
25		岩垣内	SB12	唐草文3	正位	
26		岩垣内	SB17	唐草文2	正位	底部欠損
27		岩垣内	SB39	唐草文3	正位	口縁・底部欠損
28		岩垣内	SB42	唐草文3	正位	
29		岩垣内	SB42(S78)	唐草文3	正位	
30		寺東	3号SX1	唐草文系	正位	口縁・底部欠損
31		江名子糠塚	1号	唐草文3	正位	
32	加曾利系	江名子糠塚	1号	加曾利3	正位	
33	東海系	寺東	2号SX1	取組式	正位	口縁・底部欠損、口縁は打ち欠く
34	粗製	森ノ木	1号	粗製	正位	埋土出土器は唐草文2併行
35		荒城神社	3号	粗製	正位	無文深鉢、口縁破損、スス付着
36		荒城神社	4号	粗製	正位	スス付着、口縁・底部を欠く
37		垣内	26号	粗製	正位	網代版、蓋石、胴下半部使用
38		垣内	37号	粗製	正位	
39		垣内	44号南	粗製		別住居に伴う
40		垣内	49号(SX3)	粗製	正位	
41		垣内	53号	粗製	正位	底部欠損、網代版
42		岩垣内	SB4	粗製	正位	網代版、埋土は唐草文3?
43		岩垣内	SB29	粗製	正位	網代版 埋土も不明
44		岩垣内	SB36	粗製	正位	蓋石跡 埋土は唐草文3段階?
45		岩垣内	SB45	粗製		網代版
46	型式不明	寺東	3号SX2		正位	胴部のみ残存
47		寺東	4号SX1		正位	胴下半部使用、網代版
48		寺東	4号SX2		正位	底部・口縁欠損
49		寺東	4号SX4		正位	底部穿孔、網代版
50		寺東	5号		正位	蓋石、底部欠損

冠農場・垣内・岩垣内・寺東・江名子糠塚の8遺跡から構成され、全体で50基の埋甕が出土している。小地域別に見るとC地域が一番多く埋甕が存在する。唐草文系24基で48%、曾利系6基で12%、加曾利E系1基で2%、北陸系1基で2%、粗製土器11基で22%、不明4基で8%となった。

約9%、加曾利E系1基で約1%、東海系3基で約3%、粗製土器22基で約23%、不明土器5基で約5%であった。後期の堀之内式の埋甕が1基確認されていることも特徴に挙げられる。最も多く埋甕に採用された土器は唐草文系土器であり、中部高地との関わり強いことが言えよう。

(4) 北飛騨地方の細分検討

A地域 この地域は、飛騨市内に位置する島・堂ノ前・大明神・岡前・中野山越・黒内細野の6遺跡から構成され、全体で22基の埋甕が出土している。北陸系12基で約55%、唐草文系1基で約5%、曾利系1基で約5%、東海系1基で約5%、堀之内式1基で5%、粗製土器6基で約27%となった。

B地域 上岩野遺跡・門端遺跡の2遺跡で構成され、出土事例は22基である。特に上岩野遺跡は中期の住居にあたる55棟の内12棟から16基の埋甕が出土し、1遺跡からの埋甕出土数が飛騨地方で最も多い。北陸系3基で約14%、唐草文系10基で約45%、曾利系1基で約5%、加曾利E系2基で約9%、東海系1基で約5%、粗製土器5基で約23%であった。

C地域 高山市内周辺に位置する森ノ木・荒城神社・牛垣内・無手無

(5) 土器型式差異に関する小結

土器型式構成を確認した結果、1つの土器型式のみを使用することはなく、様々な系統の土器を埋甕に採用しているが、大別での地域ごとに見ると土器の採用に差異がある。西濃地方は東海系の土器が多く使用されるが、突出した数値ではない。また、他地域では確認されていない里木Ⅱ式の埋甕がある。東濃地方は、井戸尻式の埋甕が確認され、岐阜県では最古段階のものである。土器構成は、東海系の使用が約50%に達していることと、加曾利E系の使用が他地域より多いことが特徴と言える。南飛騨地方は不明土器が多く、出土数が少ないが、主体的に埋甕に採用される土器型式は存在しない。北飛騨地方は、細分検討から北陸に近いA地域の遺跡は、北陸系の土器を他の地域より多く使用する傾向にある。B地域とC地域は、唐草文系土器が主体的に使用される傾向にある。こうした各地域の傾向は、在地に定着している土器や地理的に近い地域の土器を多く使用しており、日常的な生活・交流が影響していると言えよう。

Ⅱ 埋甕の埋設方法の差異

(1) 研究の方法

本章では埋設方法について分析を行う。埋甕の埋め方には、正位と逆位が存在する(図2)。先行研究において、埋設方法に注目した研究は存在するが^{17)、18)}、岐阜県においてこの傾向を整理したものは無い。そこで、本節では正位と逆位の割合を整理する。



図2 埋甕埋設方法の模式図

(2) 各地域の埋設方法の検討

西濃地方 正位は7基で逆位7基、不明6基である。比率は正位・逆位共に35%で、不明が30%となった。

東濃地方 正位は31基で逆位1基、不明12基であり、割合は正位が約70%、逆位は約2%、不明が約27%であった。正位の割合が高く、後述する南飛騨地方とC地域といった東日本の土器構成を持つ地域と類似する。

南飛騨地方 正位13基、逆位0基、不明が5基出土した。割合は正位約72%、不明約28%であった。埋置形態不明埋甕が5基存在するが、逆位での埋設がなくなる結果であった。

北飛騨地方 正位が74基、逆位14基、不明6基であり、割合は正位が約79%、逆位が約15%、不明が約6%である。

表4 系統別埋甕集成3

北飛驒地方

NO	系統	遺跡名	出土住居	時期	出土位置	備考
1	曾利系	堂之上	6号	曾利Ⅱ	正位	
2		堂之上	26号(古段階)	曾利Ⅱ	正位	
3		堂之上	27号②	曾利Ⅱ	正位	埋土に神明、唐草文3
4	唐草文系	堂之上	14号	唐草文3	正位	蓋石
5		的場	2号	唐草文2	正位	リボン状突帯
6		桜瀬神田	5号(新)	唐草文3	正位	
7	加曾利系	堂之上	26号	加曾利Ⅲ	正位	
8		桜瀬神田	2号	加曾利Ⅲ	正位	蓋石
9	東海系	桜瀬神田	3号	取組		口縁欠損
10		桜瀬神田	4号	島崎Ⅲ	正位	
11	粗製	堂之上	27号①	粗製	正位	
12	不明	水口				口縁欠損、網代痕
13		水口				蓋石
14		桜瀬神田	1号(古)		正位	スズレ状圧痕
15		桜瀬神田	1号(新)		正位	蓋石、口縁欠損
16		桜瀬神田	5号(古)		正位	
17		桜瀬神田	10号			
18		桜瀬神田	10号			蓋石

西濃地方

NO	系統	遺跡名	出土住居	時期	出土位置	備考
1	北陸系	塚奥山	SB11	大杉谷	逆位	
2		塚	2号	大杉谷	正位	
3		店町		串田新		
4		店町		串田新		
5	東海系	塚奥山	SB4	神明	正位	
6		塚奥山	SB6	神明	正位	
7		塚奥山	SB25	島崎Ⅲ～山の神	正位	
8		塚奥山	SB39	咲畑	逆位	
9		山手宮前	SB5	咲畑	逆位	底部穿孔
10		小園御祭田	SB1	咲畑	逆位	
11		塚原	SB10	山の神	正位	蓋石
12		中野	1号竪穴	取組	正位	
13	関西系	山手宮前	SB6	里木Ⅱ	逆位	底部穿孔
14		戸入村平	SB12	里木Ⅱ	逆位	
15	粗製	塚奥山	SB28	粗製土器	逆位	
16	型式不明	戸入村平	SB17			
17		藍津	3b号		不明	胴部片
18		藍津	6号		不明	胴部片
19		御望	SB11		正位	
20		重竹				

(3) 北飛驒地方の細分検討

A地域 正位は13基、逆位が8基、不明が1基出土している。割合は正位が約59%、逆位は約36%、不明は約5%である。A地域では、おおよそ6:4で正位が多数である。

B地域 正位17基、逆位5基が出土している。割合は正位が約77%で、逆位は約23%である。おおよそ8:2となり、A地域と比較すると正位が増加することが見て取れる。

C地域 正位44基、逆位1基、不明が5基で、割合は正位約87%、逆位約2%、不明が約11%となった。A・B地域と比較すると逆位の埋甕が減少しており、特にA地域とC地域では、埋置法の選択の差異が見て取れる。

(4) 埋設方法に関する小結

以上、埋設方法について各地域別に分析を試みた。岐阜県では普遍的に正位の埋甕が多く、岐阜県全体として約7割を占める。しかし、小地域別では正位と逆位の構成に差異が見られ、北陸に接する北飛驒地方のA地域と西濃地方では、逆位埋甕の割合が増加し4割程となる。

Ⅲ 土器型式と埋設方法のセット関係

(1) 大別地域での検討

土器型式の構成と埋設方法の検討から、各地域別に主体的に埋甕に使用される土器型式に差があり、埋設方法は中部高地から離れるにつれ、逆位の割合が増加した。そこで、土器型式と埋設方法にセット関係があるか検討する。なお、これまでは割合を示していたが、セット関係の検討では母数が少なくなるため、割合は示さない。

西濃地方 北陸系の埋甕は、正位1基・逆位1基・不明2基である。東海系は正位5基・逆位3基であった。関西系は逆位2基のみである。粗製土器は逆位1基である。型式不明埋甕は正位1基・逆位0基・不明4基であった。

表5 系統別埋壙集成4

東濃地方						
No	系統	遺跡名	出土位置	時期	出土位置	備考
1	井戸尻	門垣戸	5号	井戸尻3		楕形文土器
2	曾利系	伊畑	4号	曾利IV		
3		阿曾田	29B号	曾利III~IV	正位	
4		阿曾田	41B号の1	曾利IV	正位	
5	唐草文系	門垣戸	1号	唐草文2	正位	リボン状突帯
6	加曾利E系	宮之脇	SB4	加曾利E3	正位	
7		宮之脇	SB9	加曾利E3	正位	
8		宮之脇	SB9	加曾利E3	正位	
9		宮之脇	SB10	加曾利E3	正位	
10		宮之脇	SB12	加曾利E3	正位	
11		宮之脇	SB13中	加曾利E3	正位	
12		宮之脇	SB13新	加曾利E3	正位	
13		神明	2号	加曾利E3	正位	
14		阿曾田	15号	加曾利E3		胴部
15		阿曾田	19号の1	加曾利E3	正位	
16		阿曾田	19号の2	加曾利E3	正位	
17	東海系	伊畑	4号和付近	取組		
18		伊畑	6号	島崎III~山ノ神		
19		伊畑	8号	山ノ神		
20		宮之脇	SB15	神明	正位	
21		宮之脇	SB16古	神明	正位	
22		宮之脇	SB16古	神明	正位	
23		宮之脇	SB16中	神明	正位	
24		宮之脇	SB16新	神明	正位	
25		宮之脇	SB16新	神明	正位	
26		宮之脇	SB23	神明	逆位	
27		宮之脇	SB24	神明		
28		宮之脇	SB25	取組~島崎III	正位	
29		宮之脇	SB25新	取組~島崎III	正位	
30		阿曾田	13A号	取組~島崎III	正位	
31		阿曾田	20号	取組?	正位(斜位)	
32		阿曾田	28号	取組~島崎III	正位	
33		阿曾田	29A号	島崎III	正位	
34		阿曾田	33号	咲畑	正位	
35		阿曾田	38号	取組~島崎III		
36		門垣戸	2号	咲畑	正位	蓋石
37		陸地	1号	咲畑	正位	
38	粗製	伊畑	c地点1号	粗製	正位	
39		東野	SH	粗製	正位	埋土は取組式
40		阿曾田	41B号の2	粗製	正位	
41	型式不明	牧野小山				
42		牧野小山				
43		土地				
44		土地				

東濃地方 唐草文系は、正位1基のみであった。曾利系は、正位2基・不明1基であった。東海系は、正位16基・逆位1基・不明5基であった。加曾利E系は、正位10基・不明1基であった。粗製土器は、正位3基確認された。型式不明土器では、不明4基であった。

北飛驒地方 北陸系は正位9基・逆位8基であった。唐草文系は正位28基・逆位4基・不明3基となった。加曾利E系は正位3基のみであった。曾利系は正位6基・不明1基を確認した。東海系は正位1基・逆位2基を確認できた。粗製土器は正位20基・不明2基であった。型式不明土器は正位6基のみを確認した。後期の堀之内式が1基正位で確認された。

南飛驒地方 本地方は、曾利系は正位3基であった。加曾利E系は正位2基のみで、唐草文系も正位3基のみであった。粗製土器も正位1基のみの出土であった。東海系土器は、正位1基・不明1基となった。型式不明土器では、正位は3基、埋設方法不明が4基と確認された。

(2) 北飛驒地方の細分検討

A地域 北陸系は、正位5基・逆位7基であった。東海系は逆位1基でのみである。

唐草文系では正位1基を確認した。曾利系は不明1基のみ確認できた。粗製土器は、正位6基のみであった。後期に属する堀之内式の埋壙が正位で1基のみ確認された。このように、A地域では、逆位の埋壙は北陸系と東海系に確認することができた。特に北陸系土器においては、出土量が多くかつ、約半数が逆位埋壙であり、他型式とは明らかな差異が認められる。

B地域 北陸系は正位2基・逆位1基を確認できた。曾利系は正位1基のみであった。唐草文系は正位7基・逆位3基であった。加曾利E系は正位2基のみ確認できた。東海系は逆位1基のみであった。粗製土器は正位5基のみ確認できた。B地域では、様々な土器型式において正位・逆位共に確認される。A地域での北陸系土器のように個体数が多く、かつ逆位が半数を占めるものは認められない。また、本地域を含めA地域でも東海系の埋壙が各々1基出土するが、共に逆

位での出土となっている。考察は次章で行うが、注目すべき出土事例と考えられる。

C地域 北陸系は正位2基であった。曾利系は正位5基であった。唐草文系は正位20基・逆位1基・不明3基を確認できた。加曾利E系は正位1基のみを確認した。東海系は正位1基のみであつ

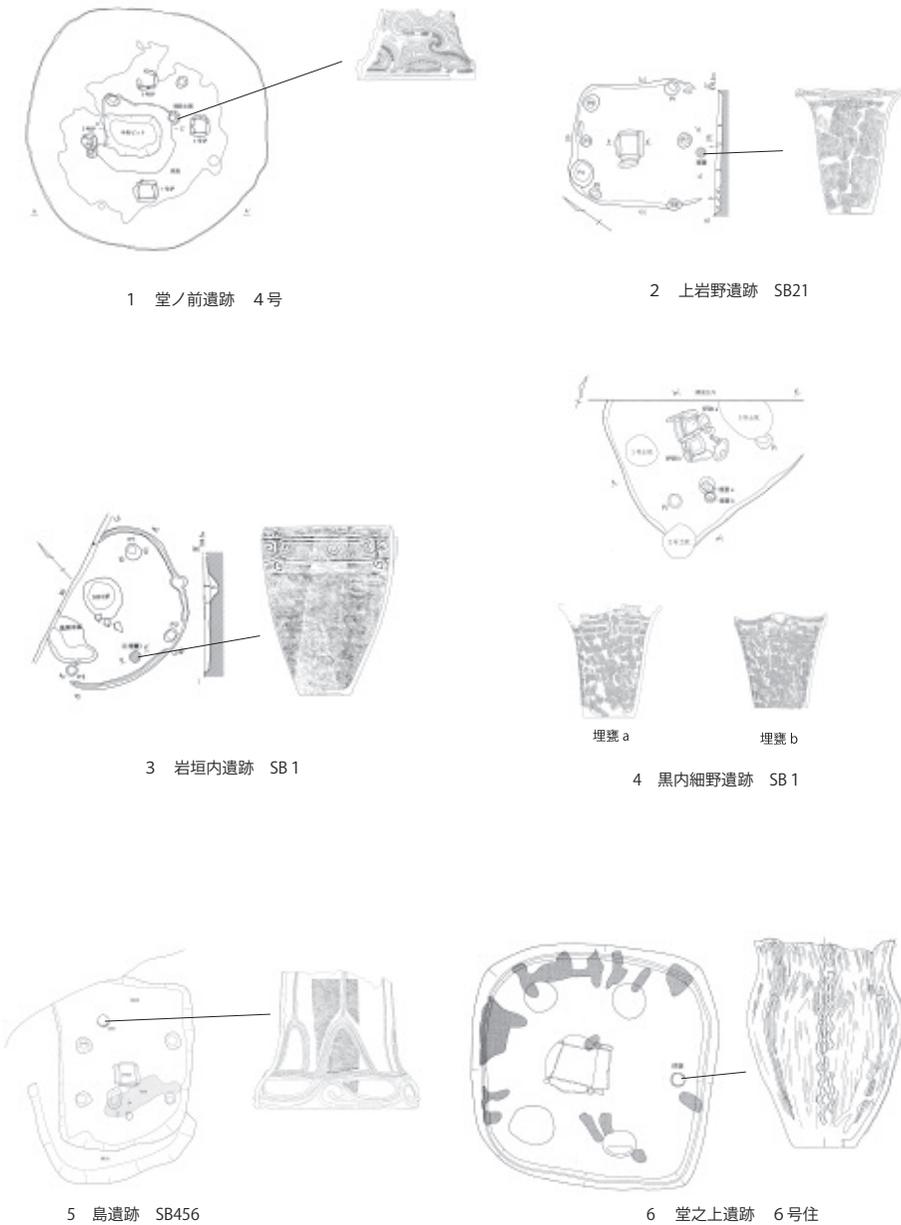


図3 埋甕と出土住居

住居 S=1/200
土器 S=1/20

た。粗製土器は正位9基・不明2基を確認した。型式不明土器は正位6基であった。

(3) セット関係に関する小結

各地域の型式と埋設方法のセット関係について分析を行った。西濃地方では東海系土器は正位が優勢であるが、咲畑式は逆位のみであった。これより新しい神明式からは正位のみが確認された。関西系土器とした里木Ⅱ式は逆位のみであった。里木Ⅱ式と咲畑式は、縄文時代中期後半の中でも古い段階であり、当該期における関西に近い地域の埋甕は、逆位が優勢となる可能性がある。ただし、出土事例が少なく断定はできない。

なお、東濃地方ではどの土器型式においても正位が優勢であり、咲畑式も正位3基が確認されている。咲畑式期に限定して言えば、西濃では逆位が採用され、東濃は正位が採用されるという結果が得られた。これは、埋甕を埋設する際の原則が正しく情報が伝播していない可能性を指摘しておきたい。

南飛騨地方の埋甕は、出土数が少ないが正位のみが採用される。そこに隣接する北飛騨地方のC地域においても正位が優位であり、埋甕を正位で埋設する情報が統一性を持って展開していると推測される。

飛騨地方では、先述した咲畑式のような関係を示す結果は得られなかった。飛騨地方において、埋甕は土器型式に関係無く、正位で埋設することを原則として展開していたと理解できる。ただし、A地域での北陸系土器は、逆位に埋設されることが多い傾向にあることが、今回の分析から明らかとなった。そこで次章では、A地域における北陸系土器の逆位での埋設に着目し、富山県を取り上げ、土器型式と埋設方法について、これまでと同様の方法で分析を試みる。

Ⅳ 富山県における埋甕の様相

富山県の埋甕集成を行い¹⁹⁾、表と分布図を作成した(表6)。富山県では埋甕の個体数が少なく屋外埋設土器が多数であり、埋甕は富山市直坂遺跡²⁰⁾、射水市串田新遺跡²¹⁾、朝日町境A遺跡²²⁾、²³⁾

の3遺跡で確認できた。屋外埋設土器を含めると、富山県で19基の埋設土器があり、このうち埋甕は7基確認できた。

土器型式 住居内の埋甕の土器型式は、報告書が古く確実に確定できるものは、串田新遺跡から出土した串田新式の埋甕1基のみであった。報告書の記述から判断すると中期中葉から後葉となるものが多い傾向があり飛騨地方とほ

表6 富山県の埋甕集成

遺跡名	出土住居	内容物	時期	埋置形態	備考
境A 1号埋甕	30号		中期中葉	逆位	
境A 2号埋甕	29号		中期後葉	逆位	
境A 3号埋甕	屋外		中期	逆位	
境A 4号埋甕	19号	土器、ヒスイ原石	中期中葉	正位	
境A 5号埋甕	屋外		後期後葉	正位	
串田新	1号	土器	串田新		
桜町	屋外 埋甕1				1988, 97, 98年度調査。第1調査区
	屋外 埋甕2				
	屋外 埋甕3		前田式	正位	
	屋外 埋甕4			正位	底部のみ
	屋外 埋甕5				土器なし
	屋外 埋甕6				土器なし
	屋外 埋甕7			正位	底部のみ
	屋外			正位	2005年報告
直坂	1号		粗製	逆位	蓋石、底部穿孔
	2号		不明	正位	蓋石
	3号		不明		
追分茶屋	屋外		中期前葉	正位	

ほぼ同時期に埋甕は存在すると考えられる。

埋設方法 住居内埋甕7基の内、埋設方法に関しては正位が2基・逆位3基・不明2基であった。母数が少ないため正確に比較できる資料ではないが、富山県における埋設方法は少なくとも、C地域や南飛騨のような傾向ではなく、逆位埋甕が多く出土するA地域と類似する傾向と推測される。型式の認定が報告書からは困難であり、唯一型式が判別できる串田新遺跡の埋甕は、埋設方法が不明でありセット関係に関する分析はできない。しかし、逆位埋甕の出土量に関しては、注目されるべきである。富山県において逆位が比較的多く確認できることは、A地域で北陸系土器に逆位が多くなることと関係する可能性が指摘できよう。

V 岐阜県における埋甕の展開と課題

岐阜県域において埋甕の土器型式差と埋設方法、それらのセット関係について整理した。埋甕は様々な系統の土器が使用され、正位・逆位共に各地域に存在するが、正位が原則として展開している。セット関係を観ると、地域的に差異が伺えるような結果も存在しており、集団間において、埋甕の受容に寛容であるか否かということが背景にあると考えたい。ただし、全体的に出土する唐草文系や東海系等から、岐阜県域では統一性を持って埋甕風習が展開していると言える。また、異系統の土器を使用した埋甕が各地域に存在する。これは、佐々木藤雄がかつて長野県諏訪地域で示した現象と同様に⁵⁾、1集団の中に様々な系統の人々が共存していることを示していると考えられる。

岐阜県域の埋甕について検討を進めてきた。見えてきた課題として、①施工率の検討では¹²⁾、時期別の分析を行ったが、本稿を含め時期細分については不十分な点が多い。現在では新地平編年など詳細に細分された編年が示されており、細分型式に努めていくことが必要である。②埋甕での系統差は見いだせるが、遺跡や地域単位での土器の複数系統が混在するあり方はどうなのか。③埋甕の確認数が多い長野・山梨ではどのような展開がされるか。これらに取り組んでいくことを今後の課題として、本稿を終えることにしたい。

謝 辞

本稿は、平成27年度に奈良大学文学部文化財学科へ提出した卒業論文の一部に大幅に加筆・修正を行ったものである。本稿・卒業論文を執筆するにあたり、大学院の指導教員である小林青樹先生・豊島直博先生をはじめ、坂井秀弥先生・植野浩三先生には日頃から厚いご指導をいただいた。また、瀬口眞司氏のご厚意により、卒業論文の内容を近江貝塚研究会において発表する機会をいただいた。そして、以下の諸氏・諸機関には、資料の見学の便宜を図っていただき、貴重なご意見・ご指摘をいただいた。末筆ではありますが、記して感謝の意を表します（50音順、敬称略）。

大石崇史、大熊茂弘、大宮次郎、岩田 崇、長田友也、清水則久、高梨清志、中村耕作、長江真和、馬場伸一郎、三好清超

各務原市教育委員会、各務原市埋蔵文化財調査センター、可児市教育委員会、川合考古資料館、岐阜県文化財保護センター、久々野歴史民俗資料館、下呂市教育委員会、下呂ふるさと歴史記念館、高山市教育委員会、高山市図書館清見分室、高山市風土記の丘学習センター、富山県埋蔵文化財センター、飛騨市教育委員会、飛騨の山樵館、みやがわ考古資料館

註

- 1) 筆者は埋甕とは屋内埋設土器と認識しており、本稿で「埋甕」と呼称するものに屋外埋設土器は含まれていない。
- 2) 渡辺 誠1970「縄文時代における埋甕風習」『考古学ジャーナル』40号 9-17頁
- 3) 木下 忠1980『埋甕－古代の出産習俗－』雄山閣
- 4) 佐々木藤雄1975「埋甕論ノート」『異貌』3 20-42頁
- 5) 佐々木藤雄1981「縄文時代の通婚圏」信濃33巻9号信濃史学会 45-74頁
- 6) 佐々木藤雄1983「縄文時代の親族構造」異貌10号 56-83頁
- 7) 佐々木藤雄1986「縄文時代の家族構成とその性格」異貌12号 82-131頁
- 8) 佐々木藤雄2008「埋甕（中部・関東地方）」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 1122-1127頁
- 9) 太田 圭2017「縄文時代における屋外土器埋設遺構の研究－「埋甕」のこれまでとこれから－」『Archaeo-Clio』第14号 東京学芸大学 1-26頁
- 10) 今泉沙希・小嶋円有佳・小林謙一2018「縄紋中期南西関東多摩武蔵野地域の屋内埋甕の検討」『セツルメント研究』9号 セツルメント研究会 77-115頁
- 11) 拙稿では（岩永2018）、39遺跡168基と報告したが、資料の再検討と蓄積により資料数が増加した。
- 12) 岩永祐貴2018「岐阜県における埋甕の様相－埋甕の施工率について－」『奈良大学大学院研究年報』第23号 奈良大学 51-67頁
- 13) 施工率とは、岐阜県における井戸尻Ⅲ式～唐草文4段階までの総住居数に対し何軒埋甕が施工されるか検討したものである。
- 14) 精製土器と粗製土器は、本来加曽利B式土器から認識されるものであるが、本稿では便宜的に地文のみを施文する土器を粗製とした。
- 15) 長田友也2010「東海地方の縄文集落の墓葬制」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅱ 墓葬制』雄山閣 255-272頁
- 16) 羽生俊郎・坂井勇雄2010『箕瀬遺跡』飯田市教育委員会
- 17) 神村 透1974「埋甕と伏甕－その違い－」『長野県考古学会誌』No.19, 20 7-33頁
- 18) 桐原 健1967「縄文時代中期に見られる埋甕の性格について」『古代文化』18-3 43-51頁
- 19) 富山県の集成に当たっては、（布尾2004・小矢部市教育委員会2006）を足掛かりに筆者自身で集成を行った。筆者の力不足もあり抜け落ちた遺跡がある。集成を続けていくことを今後の課題の1つとする。
- 20) 橋本 正1973『直坂遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
- 21) 神保孝造1973『申田新遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会
- 22) 橋本正春1989『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編4－境A遺跡遺構編』富山県教育委員会
- 23) 橋本正春1992『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編7－境A遺跡総括編』富山県教育委員会

参考文献

- 泉 拓良2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 502-509頁
- 今福利恵2011『縄文土器の文様生成構造の研究』アム・プロモーション
- 岩田崇・大石崇史2003「飛騨の縄文住居」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文時代文化研究会
- 大石崇史2009「岐阜県における縄文集落関係遺構」『第10回記念研究集会発表要旨集』関西縄文文化研究会 321-369頁
- 奥美濃地域研究会2005「岐阜県奥美濃地域の遺跡紹介－1－郡上市立明宝歴史民俗資料館収蔵資料の紹介」『美濃の考古学』第8号
- 長田友也・高橋健太郎2015「付 岐阜県関ヶ原町中野遺跡出土土器の紹介」『東海縄文研究会第5回例会予稿集 咲畑式土器とその周辺 その2』東海縄文研究会
- 小矢部市教育委員会2006『桜町遺跡縄文土器検討会資料集－縄文時代中期末・後期初頭について－』
- 春日井恒・長谷川幸志2003「岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文時代文化研究会
- 額綱茂・高橋健太郎2008「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 494-501頁
- 縄文研究の地平グループ2016『シンポジウム縄文研究の地平2016－新地平編年の再構築－発表要旨』セツメント研究会
- 白川 綾1997「第7章 常安王神の森遺跡出土縄文時代中期後葉～後期初頭土器群の検討」『常安王神の森遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財センター
- 東海縄文研究会2017『第2回東海縄文研究会シンポジウム予稿集 咲畑式とその周辺』
- 富井 真2008「北白川C式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 510-515頁
- 布尾和史2004「縄文時代中期（上山田式期・古府式期）の遺構出土資料〔石川県・富山県〕」『縄文集落研究の新地平3－勝坂から曽利へ－資料集』縄文集落研究グループセツメント研究会
- 増子康眞1998「東海地方西部地域の縄文中期後半土器編年再考」『古代人』59名古屋考古学会
- 増子康眞1999「東海地方 中期後半」『縄文時代』10号 第2分冊 135-140頁
- 百瀬忠幸1984「縄文時代における地域性と地域集団－長野県中・南信地方をめぐる－」『異貌』11号 61-83頁
- 吉川金利2008「唐草文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 436-443頁

発掘調査報告書

- 浅野哲男ほか2000『岩井谷遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
- 石原哲彌ほか1988『寺東遺跡、西保木（対岸）遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
- 石原哲彌ほか1991『垣内遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
- 上嶋善治1995『岡前遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
- 上嶋善治1997『カクシクレ遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
- 上原真昭2000『岩垣内遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
- 宇野治幸1993『追分遺跡・下開田村平遺跡』岐阜県教育委員会
- 大江まさる1973『畑畑遺跡発掘調査報告書』各務原市教育委員会
- 大知正枝1997『小関御祭田遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
- 大宮次郎2005『上岩野遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
- 各務光洋1993『陰地遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
- 清見村教育委員会1983『門端縄文遺跡発掘調査報告書』

- 熊崎 保1986『桜洞神田遺跡』萩原町教育委員会
小谷和彦1997『山手宮前遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
佐野康雄1995『飛瀬・底津遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
篠原英政・吉田英敏ほか1989『塚原遺跡・塚原古墳群』関市教育委員会
田中彰ほか1992『江名子糠塚遺跡・無手無冠農場遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
谷口和人ほか1997『西田遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
戸田哲也1993『中野山越遺跡発掘調査報告書』吉城郡古川町教育委員会
戸田哲也1997『堂之上遺跡』大野郡久々野町教育委員会
中山豊・北平朗久2014『黒内細野遺跡』飛騨市教育委員会
野村宗作ほか1998『牛垣内遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
林直樹・早川正一1996『堂ノ前遺跡発掘調査報告書』宮川村教育委員会
平田篤志ほか2007『赤保木遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター
堀 正人ほか1989『椿洞遺跡-岐阜市民公園整備関連事業-』岐阜市教育委員会
坂東 肇ほか2000『戸入村平遺跡Ⅱ・小谷戸遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
紅村 弘1974『飛騨桜洞・沖田』萩原町教育委員会
紅村 弘1976『門垣戸遺跡』坂下町教育委員会
松田典人1990『店町遺跡-県道高山-八幡線・畑佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』明方村教育委員会
増子 誠ほか1998『塚遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
増子康真ほか1971『神明遺跡』美濃加茂市教育委員会
武藤貞昭1995『戸入村平遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
三島 誠2007『榎原村平遺跡』岐阜県教育財団文化財保護センター
三好清超2012『島遺跡2・塩屋金清神社遺跡3』飛騨市教育委員会
三好清超2013『大明神遺跡』飛騨市教育委員会
三輪晃三ほか2007『塚奥山遺跡』岐阜県教育財団文化財保護センター
吉田英敏1994『川合遺跡群』可見市教育委員会
渡辺 誠1985『阿曾田遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会
渡辺 誠ほか1993『荒城神社遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
渡邊 稔2007『中野大洞平遺跡Ⅱ』岐阜県教育財団文化財保護センター

挿図出典

図1, 2 筆者作図。図3 各報告書より引用。一部加筆。

Summary

This paper examined the pottery-type and burial method of buried pottery in Gifu prefecture and showed development of buried pottery.

As a result of examination, various types of pottery were used for the buried pottery, and it turned out that about 70% of the burial method was the orthodox.

From the set relation of pottery-type and burial method, in A region set in Hida district, the Hokuriku type pottery increased in number, the inland region of the Seino region also

dominated the inverse.

However, when looking at the pottery that comes out as a whole, the orthotics are often used, and in Gifu prefecture it can be said that buried pottery is developing with uniformity.

On the other hand, there were differences in the method of embedding pottery-type, and pointed out the possibility that there is a background such as whether or not it is tolerant to accept information as buried pottery among groups.

Key words: Buried pottery, Pottery-type, Burial-method, Expansion